九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

教養に不可欠な何かとしての自己知：アベラール倫理思想を手がかりに

永嶋，哲也

https://doi.org/10.15017/2328432

出版情報：哲學年報. 58, pp.63-78, 1999-03-10. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

教養に不可欠な何かとしての自己知

―アベラール倫理思想を手がかりに―

永嶋哲也

あなたが、私の賞賛を斥けているのはよろしい。それによってあなたは、一層称賛に値することを示しているからである。書にも「義しき者は先ず己を責む」（箴言18：17）と記されてあり、また「己を卑うする者は高うせらる」（ルカ18：14）と記されてある。だがあなたの心の中も、あなたのお手紙に書いた通りであってくれればいいが！もし心でもそのとおりだとすると、あなたの謙譲は本物であって、私の言葉などによって損なわれる心配はない。だが、賞賛を避けるように見せることによってかえって賞賛を求めたり、口で斥けていることを心で欲したりすることのないように注意してほしい。このことに関し、聖ヒエロニムスは童貞女エウストキウムに対して、他のことに交えてこう言っている、「我々は、自然に具わる悪い傾向に導かれがちである。自分にへつらう者に対して我々は好んで耳をかす。そして自分はその賞賛に当たらないと反対し、またさかしき恥じらいの色で面を染めながら、内心ではその賞賛に対して喜んでいる」。

『アベラールとエロイーズ――愛と修道の手紙――』
（岩波文庫・畠中尚志訳）第五書簡より(1)

I　「教養」とは何か

「教養」とはそもそも何であろうか？この問に正面から答えるということは、本論考において目指されてはいず、むしろ別の方面から「教養」に関連する問題を取り扱ってみたい。つまり、どのようなものが「教養」と呼ばれているか、あるいはどのような者が「教養人」だと思われているか、ということの確認を議論の出発点として、「教養人」の原初形態とも言える一二世紀知識人の一サンプル（つまり、上記引用のアベラール）の倫理思想を手がかりに、「教養」にはそもそも何が必要であろうか？という問題について論じたいと思うのである。

さて、現在我々はどのようなものを「教養」と呼んでいるだろうか。実のところ、「教養」と言う語は多義的であって、例えば鷲田小彌太氏は教養を、古典などは読まずテレビジョンをひたすら観る方が獲得できるようなものだと、あるいは読書をするにしても、小説でもマンガでも乱読すれば得られるようなものが教養だと言う。[2] このような意味での「教養」は世の中を渡っていくに際して意図せぬときに役に立つような「雑学」とも呼んでよいような類の知識であろう。本論考においてそのような意味での「教養」を扱うつもりはない。

そもそも近代日本において「教養」という言葉は大正時代以降のものであり、その理念を初めて明確に打ち出したのは、「すべての芽を培え」と表現した和辻哲郎であると言われる。歴史的には、日露戦争の勝利後、儒教や武士道の衰退ともあいまって、他国に対して傲慢・不遜な態度をとるようになった日本、専門分野に閉じこもった技術者が幅を利かせ、拝金主義が蔓延する、そういった社会状況に危機感を感じた者たちが打ち出したスローガンである。それでは、日本にはそれ以前、「教養」に相当するものはなかったのかと言えばそうでもないようだ、赤塚行雄氏によれば、[3] 和辻の教養理念は新渡戸稲造の「養神」理念に源泉を求める事ができるようである。新渡戸は、以前から日本語にあった「修養」を、道徳の実践、あるいはトレーニングという意味での「修身」と、文学、芸術、哲学、宗教、歴史等を

学ぶ事で人格を陶冶するという意味での「養神」とに区別し、さらに当時の一高にあった「栄華の巷、低く見」る「籠城主義」を批判して、「ヨリ世界的」「ヨリ人類的」「ヨリ内面的」な名著に親しむというのを奨励した。森戸辰男によれば、新渡戸による読書の奨励は、General Culture を目指してのものであって、多読博覧、博学多識を目指したものでは決してなかった。

このように見てみれば、新渡戸・和辻の「教養」の理念こそ、現在の大学制度における「教養教育」の目指している（あるいは、目指していた）目標であると分かるだろう。しかし、「教養教育」の理想として語られる姿はともかくとして、実際の大学教育においては、新渡戸の嫌悪した紋切り型で無思想・無情熱な講義が多数を占めるというのが現状ではないか。そして「教養ある人」というのは「もの知りな人」「博学な人」という程度の意味となり、実際、人文系の大学教授の中にも、先に取り上げた鷲田のように、博学多識をもって「教養」であると考えている者さえいる。新渡戸・和辻の後輩たちの中から、巷の民を低く見るような「エリート」意識に凝り固まった偏狭な人物が次々と出て、例えば官僚となって国を食い潰そうとさえしている現状は、彼らが最も避けたかった事態ではないか。私見では、「すべての芽を培え」的な一般教育、様々な分野の様々な知識を教え込む事と、人格の陶冶であるべき教養の獲得との間には歴然とした断絶があって、その断絶は跳躍しなければ、教養に似て非なる「衒学」に陥ってしまうと考える。その跳躍を可能にするものこそ、「教養にとって必要不可欠」なものと言えるような何かであり、本論考で考察したい事柄である。

Ⅱ　一二世紀欧州という時代とアベラールという知識人

日本の現状における教養衰退の形は、明治政府が手本とした近代ドイツに既に存在していたと言える。いわゆるドイツ独自のエリート階級である「教養市民層」において、非教養層を軽蔑する悪しき「エリート」意識と排他性がみ

られ、また教育制度が彼らの既得権益を守っていたと伝えられている[4]からである。しかし、本来、ヨーロッパにおいて「教養人」あるいは「知識人」の姿はそうでなかったはずで、我々は彼らの要件である大学教育（もしくはそれに相当するような高等教育）を遡ってゆけば、彼らとは、いや現代日本の知識人たちとも異なる知識人の姿を見ることになる。即ち、大学制度が整備される一三世紀に先立つ一二世紀において、講義を生業とする職業的知識人たちが都市部に現われ始めた。私が言いたいのはその中にあっても、パリとその近郊を舞台に活躍し、西欧中に名声を轟かせたピエール・アベラール（ラテン名：ペトルス・アベラルドゥス Petrus Abaelardus）[5]のことである。

当時、西欧は各都市が勃興し、最初の官僚都市が形成されつつあった。芸術においてはロマネスクからゴシック様式へと移り始め、社会的には貨幣経済が発達し、ローマ法も復興された。文学においてはラテン文学が、古典、韻文、散文において古典的な様式、新しい様式において復興し、それにともなって西欧各国において自国語による著述もさかんになった。そして学問分野においては、東方からギリシャ・アラビア風の数学、天文学、哲学が入ってき始めた、そういう時代である。これら古典の復興と新しい芸術、社会形態、自由な気風、等々をもって当時の西欧は「一二世紀ルネッサンス」と呼ばれる[6]が、アベラールは、その一二世紀ルネッサンスの知識人としてしばしば真っ先に名前を挙げられるような、一二世紀をまさに特徴づけている人物の一人である。アベラールに関して最も評価されるべきなのは彼の学問上の業績であり、既成通念からの自由さ、鋭敏で理知的な思考、知識に対する貪欲さなど、明らかに彼は論理学者として、そして哲学者としても、おそらくは知識人一般としても、ヨーロッパ中世を通じて屈指の存在であろう。だがしかし、今日の我々に彼の名を知らしめているのは彼の学問的業績よりもむしろ、西洋史上、きわめて有名なスキャンダル（恋愛事件）とその後の書簡の方であろう。

彼は一〇七九年、騎士階級の家の長男としてブルターニュ地方のパレに生まれた。学問を好んだ彼は、実物の剣の代わりに論理学の剣を取り、各地を遍歴した後、学問の中心パリに至る。ほどなくして、騎士が槍試合でライバルを

打ち負かすように[7]、彼は師であるシャンポーのギョームを議論で打ち負かして名声を得る。そして推定では一一一四年頃、三〇代中頃であったアベラールはその名声の中で「情欲の手綱を緩め始めた」、つまりまだ見ぬ貴婦人に恋する物語の中で語られる騎士のように、当時、才色兼備と名高かったエロイーズというまだ見ぬ少女に恋をしたのである。彼は、彼女の保護者である叔父のフュルベールと交渉して、彼女の家庭教師を務めることを条件にしてフュルベールの家に下宿を得る。「我々はまず家を一にし、次いで心を一にした」、そして「教育という口実のもとに我々は全く愛に没頭した」と彼は言う。しかしこのようなことが彼女の保護者に知れないはずはなく、ついにはフュルベールの激しい怒りを買い引き離されてしまう。だがエロイーズは既に身籠っていたのでアベラールは彼女をその叔父の元からさらってしまい、当然、その叔父の怒りに油をそそぐことになる。アベラールはフュルベールにエロイーズとの結婚を約束した（この結婚自体はフュルベールも望んだものであった）後、彼女を一時的に修道院にかくまってもらう。しかしこれがエロイーズの親族に、アベラールが結婚の約束を反故にしたとの誤解を与えた。怒りに我を忘れたフェルベールは暴漢を使って、アベラールの「彼らの苦しみを引き起こした源である」「身体の或る部分を切断した」のである。その後、彼はエロイーズを（今度は本当に）修道院へ入れ、自らも修道士となる。

我々は、この二人に起こった事件をアベラールが友人に当てた書簡によって知ることができる。そしてアベラールとは別々の修道院で暮していたエロイーズもその書簡を偶然手にし、彼に手紙を書く、という仕方で書簡の往復が始まった。アベラールによる若き自分の過ちと不幸の告白、エロイーズによるアベラールに対する変わらぬ想いの告白、それに対するアベラールのあまりに理知的な返答、などが書かれている二人の書簡集を読むとき、我々は彼らの内面を語る率直さに驚かされずにはいられないだろう。一二世紀が自由な表現の時代であったからとはいえ、当時、書簡というのは第三者に読まれることを覚悟の上でなければ書けなかったものである。特に後の恋愛文学にも大きな影響を与えたエロイーズの書簡に見られる情熱はあまりにも美しく、「神に誓ってもうしますが、たとえ全世界に君臨する

アウグストゥス皇帝が私を結婚の相手に足るとされ、私に対して全宇宙を永久に支配させると確約されましても、彼の皇后と呼ばれるよりはあなたの娼婦と呼ばれる方が私にはいとしく、また価値あるように思われます」[8]と彼女が言うとき、誰もが心を動かされずにはいられないのではなかろうか。実際、我々は彼女のその告白が口先だけのものではないということを彼女のその後の記録からもうかがい知ることができる。

Ⅲ　傲慢か謙虚か

彼の同時代人であれ、現在の研究者であれ、エロイーズのことを悪く評する者は稀であり、熱烈な賞賛者にも事欠かないが、しかしアベラールの方はそうでもない。当時においても現代においても、彼に共感を持つものも確かにいるものの、それ以上に不愉快に思う者の数の方が多そうである。何より学問業績の評価において、彼の鋭敏な知性を高く評価する者がいると同時に、論理学的な手法、理性的な探求方法を神学にもあてはめるという彼の学問姿勢を危険視する者たちもいた。このような相反する彼の評価の一例を挙げるならば、小説『薔薇の名前』においてウンベルト・エーコはアベラールについて、敵役のホルヘには「聖書の光には照らされてない理性に依拠しながら…あらゆる問題をふるいにかけようと欲し」た「危険極まりない思想」の持ち主だと語らせているが、それに対して主人公であるウィリアムにはアベラールを断罪したソワッソン教会会議を激しく批判させている。[9]つまりアベラールはエーコの小説の中で、人間理性に対してどのような態度をとるのかを示す試金石のような扱いをされていると言える。

とはいえ、彼の同時代人であれ現代人であれほとんどすべて（ごく小数の証言者を除けば）、彼が傲慢である（あるいは少なくとも、傲慢であった）という評価では一致しているようであり、彼の学問業績に好意的な評価をする者たちも例外ではない。実際、我々も件の往復書簡の中に「当時私の名声は甚大であり、また若さと風姿において優れていたから、かりにどんな女性を愛そうともその拒絶に会う心配はなかったのである」（第一書簡、二三頁）というよう

な彼の文章を見出すとき、当惑を感じずにはいられないのではないか。自分自身をこのように臆面無く表現するというのは、傲慢と言わずして何と表現すればいいだろう。我々は彼に対して、鼻持ちならない不快な奴だという印象を持ってしまう。

しかし、数としては少ないものの同時代人によってまったく逆の証言もなされている。つまり、「尊者」と呼ばれるクリュニーの修道院長ピエールが、晩年のアベラールを評して「彼ほど謙譲な人を私は見たことがない」と評しているのである。一一四〇年に、アベラールはサンスの地方公会議にてクレルヴォーのベルナール等による告発のもと、異端宣告を受ける。既に六一歳の高齢であったにもかかわらず彼はローマへと直訴のために旅立つが、途中クリュニーの修道院にて引き止められ、そこの院長尊者ピエールの取り計らいでアベラールの破門は撤回される。そして公会議の二年後の一一四二年にこの修道院長の庇護の下、アベラールはサン・マルセル修道院でその生を終える。先の証言は、尊者ピエールがエロイーズ宛にアベラールの死を伝えるために送られた書簡の中に見出されるものである。[10] 確かにエロイーズはアベラールの妻であった女性であるので、リップサービスとして多少誇張があったかもしれないなどと考えることはできるだろうが、しかし「尊者」とまで呼ばれる修道者がまったく事実に反するような嘘を報告するとまでは到底考えられない。

同一人物について、「傲慢、不遜」と「敬虔、謙虚」という相反する評判が伝えられているというのは奇妙なことではないか？筆者には奇妙なことだと思われるのであるが、この点に関しては、「若い頃、自らの才能を誇り高慢であったアベラールが様々な事件で失意を経験した後、謙虚になった」と説明されるのが一般的である。その一例を取り上げれば、『アベラールとエロイーズ』巻末の解説において訳者の畠中氏は、「第一書簡における彼のやや思い上がった態度」が「第五書簡の後半頃から」「心から神の前に恐れ入っている」姿に変わると説明している。

しかし件の書簡集は、アベラールがサン・ジルダの修道院を去り、パリ郊外のサント・ジュヌヴィエーヴの丘にい

たと推定される一一三二―三七年の数年間に書かれたと見られている。[11] それ以前に波乱に満ちた人生を送ってきた彼が比較的平穏に過ごした数年間で「傲慢、不遜」な輩から「敬虔、謙虚」へと性格が変わるというのが果たして説得力を持つだろうか？

いやそもそもアベラールがもし、「心から神の前に恐れ入っている」と見えるほど「謙虚」になったとすれば、その謙虚な者が自らの若いときを振り返って自己批判的に書いた文章を、字義通りに受け取ってよいものだろうか？つまり、例えば『告白』においてアウグスティヌスが自らの若いときを「放蕩」と表現するのを読んで我々は、アウグスティヌスが文字どおり「放蕩無頼の」若者だったと受け取ってよいものだろうか。もちろんそんなことはないだろう。後のアウグスティヌスにとっては「放蕩無頼の」としか思えない若い頃の彼は、我々が通常もつような基準からすればむしろ「実直誠実」と言うべき姿をしている。[13] それと同様に、後のアベラールから見て若い頃のアベラールが「傲慢」と思えたからといって、実際に、我々がもつ通常の基準からしても「傲慢」であるとは限らないではないか。[12]

さらに、同時代人の証言として、先の書簡集とほぼ同時期のもので、彼の謙虚を報告するものがある。アベラールは神学において師であるランのアンセルムスを批判して、彼の弟子であるランスのアルベリクスらや、さらのその弟子のモルターニュのワルテリウスらを敵に回してしまった。しかしそのワルテリウスが、つまり、一度はアベラールの学説を激しく批判した（一一二〇年代前半に書かれたと推定される神学書においては批判を展開している）人物が、後には（つまり一一三四年ないし三五年に書かれたと推定される書簡においては）、彼の謙虚さを賞賛しているのである。[14] おそらくはその間、アベラールと面識を得る機会があったのであろうが、時期的にはもちろん、アベラールの晩年についてではなく、ちょうどエロイーズとの書簡の往復が始まった頃のものである。このことは、先の尊者ピエールの証言よりも奇妙な事態ではないか。

そして、筆者が持っているもっと素朴な疑問は、もしアベラールが悪評通りの鼻持ちならない傲岸不遜の自惚れ屋

であったのならば、当時、稀にみる才女として名高かったエロイーズがなぜ彼のことを最期まで愛し続けた、いや人間として尊敬し続けることができたのだろうかということである。[15] 人はそれに対して、「彼女は愛という熱病にかかっていたから」と言うかもしれないが、しかしそのような熱病は距離をおいてみれば、あるいは時間が経ってみれば、あっけないほど簡単に冷めるものである。しかし、往復書簡において、またその後のエロイーズが取った行動において彼女の態度は変わらない。筆者には、彼女がその手の「熱病」ゆえに盲目であったとは思えないのである。

Ⅳ　アベラールの倫理思想

前節で論じた奇妙さに対してはむしろ、アベラールの倫理思想を考慮に入れたときはじめて奇妙ではなくなると思われる。即ち、彼の倫理思想の特徴は、善悪の基準が行為者の内面性に求められるということにあると言われる。例えば彼は、聖書から「情欲をいだいて女を見る者は、心の中で姦淫を犯したのである」（マタ5：28）と引用し、罪が成立するのに必ずしも行為まで至る必要はないと言う。つまり罪は、悪しき意志に自らが同意した時点で成立するというものである。

しかしもし彼が罪の成立を行為者の内面に求めたというだけならば、そのような倫理観は、そもそもアウグスティヌスが罪を、正義の禁じているものを求めようとする〝意志〟であると定式化していることを考えれば、西欧中世における倫理観の伝統から大きく外れるものではない。だがアベラールは罪が成立するのは決して意志ではなく、意志への同意であると言う。即ち、悪しき意志とは、我々を悪しき行為へと傾けるような精神の「欠陥」（vicium）に過ぎないのであって、そのような傾きがあること自体は罪ではない、我々がそのような傾きに征服され、その傾きに同意した時点で罪が成立するのだと言うのである。しかし彼が罪を、ほとんど「本性的」と言ってよいような「傾き」には求めず、そのような傾きに対する「同意」であるとしたことは、罪の成立を内面性に求めるという伝統をぎりぎり

まで推し進め、危険な様相までも帯びさせることになる。

即ち、悪しき行為への傾きを持ってるということではなく、悪しき意志へ自ら同意した時点で罪が成立するという仕方で罪について理解するならば、我々自身が意志したのでも同意したのでもない「原罪」について説明できなくなるはずではないか。実際、『倫理学』[16]において彼は原罪に関して、「祖先の過ち（culpa）による呪い（dampnatio）」であると述べ、例えば生後すぐの乳児は「過ちは持ってない」が「罪の汚れ（sordes peccati）」は被っていると言う（『倫理学』五四一頁、*Ethics* pp. 20–22）。彼のこのような言い方を受けて、彼の批判者たちは彼が原罪を否定したと批判した。実際、彼自身の主張が、批判者たちの言うとおり、原罪を否定したという事を意味するかどうかという点について考察することは、本論考の趣旨からは外れるので立ち入らないが[17]、彼の学説自体、彼の表現自体の中に、そのように受け取られる危険性が含まれているというのは否定できない事実であろうし、また彼自身、自分の学説がそのように解される危険性を全く予知できなかったと考えるのも不自然なことであろう。

いや、むしろアベラールはわざわざ過激な表現をして、保守的な者たちを挑発せずにはいられなかったのではないだろうか、とさえ思われる節もある。彼は善行の成立を意図に、つまり同意されるべきだと信じていることへの同意に置くのだが、その場合、当人は善いつもりの意図で行ないながら結果としては善くない行為にいたってしまうような場合が問題となるだろう。例えば、イエスが神を騙る不届き者だと信じてイエスとその弟子たちを迫害した者たちの場合などである。彼らは、彼らが確かに正しいと信じていたことに従って行動したのではないか。同書においてアベラールは、イエスが神であるということを知らなかったという過失に、つまり無知や誤謬にそのような者たちが陥っていたということは認めるものの、「無知も無信仰さえもそれ自体では罪ではない」と言う（『倫理学』五六二頁、*Ethics* pp. 54–56）。そしてさらには、もし自分たちの良心に反してイエス等を見逃していたら、即ち彼ら自身が同意すべきと信じてはいないことに同意したならば、「より大きな罪を犯していたことになったであろう」とさえ言うのであ

る（『倫理学』五六九頁、*Ethics* p. 66）。キリスト教の信仰を持っていない者が読んでも驚きを感じる議論であるから、たとえ一二世紀が中世にあっても表現の自由な時代であったとはいえ、あまりに過激なものであったであろうと予想される。そして、当然のように彼は激しい反発を買う。

しかし彼がここまで言う事ができたのはなぜだろうか？同時代人からの反発を予想できなかったとは考えづらい。むしろ彼をこのような言動にまで至らせたのは、（こう言うのは少し逆説的に聞こえるかもしれないが）アベラールの神に対する信頼、あるいは敬神ではないかと思われる。同書において彼は、神が「心と腎の証人」であるので行為ではなく精神に注目すると言う（『倫理学』五五二頁、*Ethics* p. 40）。たとえ他のキリスト教徒から誤解されても自分の本心は神には知られている、という信頼がなくて、このような議論が果たしてできるであろうか。実際、彼が自らの倫理観の根拠とするのは、人間たちは人の善悪に報いるに際して、現われの次元、つまり行為の次元でしか判断できないが、神は意図という心の状態に注目する、というその点なのである。いやむしろそうであれば、倫理学において彼を過激な内容、表現へと突き動かしたのは、神に対する恐れ、緊張感と表現した方が適切なのかもしれない。どのように表面を取り繕おうと、つまりどのように行動しどのように発言しようと、神においてはその意図、本心が見透かされていて、まさにそこにおいて自らの善悪、功罪が決定してしまうというのは、非常に大きな緊張感を恒常的に伴う倫理観ではないか。

V　謙虚であるということと自己知

さて、このような彼の倫理思想を考慮に入れると、冒頭に掲げた引用文の真意が分かってくる。つまり、心から謙虚となるのではないうわべだけの「謙遜」は、たとえそれが巧妙になされて万人が欺かれるほどであっても、神の前ではそれが偽りのものだという事はとうてい隠しおおせず、まったく意味がないものとなる。いやむしろ、そう振る

舞うことで自分は謙虚だと人を欺き、本心では自己愛の中で胡座をかいているのであるから、それは罪でさえある。だからこそ彼は、彼からの賞賛を否定するエロイーズの謙虚さに対して「一層賞賛に値する」と評価しながらも、「賞賛を避けるように見せることによってかえって賞賛を求めたり、口で斥けていることを心で欲したりすることのないように注意してほしい」と注意を促しているのである。言い換えれば彼は、謙虚であることは高く評価しながらも、表面上だけの謙遜は嫌悪しているのである。おそらくアベラールの教え子であったエロイーズにとっては、そのような倫理観は既に馴染みのものであったであろう（だからこそ彼女は内面を赤裸々に告白しているではないか）が、それでも敢えてここで注意をしているというのは、彼がうわべだけの謙遜をどれほど嫌悪していたかを示すものであろう。そして当然、謙虚に対するこのような考え方は彼自身の行動ももちろん規定していたはずである。即ち、アベラールは自らの倫理観からすれば、うわべだけの謙遜というものはできなかったはずである。そうであれば、彼が謙遜に満ちた言動をしなかったということが、あるいは謙遜に満ちた文章を我々に残さなかったということが、必ずしも彼が謙虚でなかったということを意味しない、ということになる。ここに至ってはじめて我々は、先に取り上げた「奇妙さ」を取り去ることができるだろう。

アベラールにとって〝謙虚である事〟というのは、〝謙虚な振る舞いをして見せる事〟や〝謙虚に聞こえる言い回しで語る／書く事〟では決してなく、〝心の底から自らの無力を痛感する事〟であった。とすれば、〝謙虚である／となる〟ために必要な事柄は何か？それは、正確な自己知であろう。

冒頭の引用の中でヒエロニムスの口を借りてアベラールが言っているように、我々はへつらいの言葉の方により耳を貸す傾向がある。もちろん他者の声によって自分自身を見誤り、過大に評価してしまうこともあるだろうが、しかしそのへつらいの声は必ずしも他人からのみ聞こえるわけではなく、自分自身を甘やかす自らの声によって増長し、奢り昂ぶることもある。そしてそのような傾きが、ヒエロニムスによって「自然に具わる」と言われるほど、我々に

とって逃れることの難しいものであるのは、まさに自分自身の声によって自惚れに陥り得るゆえであろう。即ち、アテナイの名士たちがソクラテスに論駁されるまで自らの無知に気付けなかったように、我々にとって自らの能力を正当に評価するということが難しいというのはもちろんのこと、「私は〜ゆえに、これを行なう」と自ら記述できるような〝意図〟についてであっても、我々は自分自身について正しく知るのは容易ではないはずである。つまり、神が人の心の中を観察できると言われるのに対して、我々は他人の心の中はもとより自分の心の中さえもはっきりとは見ることができない。

外からのものであれ内からのものであれ、我々がへつらいの声に耳を貸す傾向があるという言わば我々の「弱さ」に目を向けるとき、彼が善悪について論じている『倫理学』という著作が「汝自身を知れ」(Scito Te Ipsum) と題されている意味がより鮮明に浮かび上がってくる。つまり傲慢という罪の問題であれ、その他の罪の問題であれ、それが行為者の内面に関り、そしてその上で「如何に生きるべきか」が問われるのであれば、自己自身の知が不可欠になる。なぜなら我々は、いとも簡単に自分自身を見誤ってしまうからである。

それゆえ、倫理の理論としてアベラールが意図を強調したとき、倫理の実践としては、自己の探求が最重要課題になったのだと思われる。しかし「汝自身を知れ」というモットー[18]を掲げるだけではなく、実践するにはどうすればいいだろうか。いやもっと限定した仕方で言うならば、自分自身の甘言に惑わされることなく自らの本心を知るためにはどのようにすればいいのだろうか。この問いに答えるには、アベラールとエロイーズが見せる危険なまでの率直さを思い起こせばよいだろう。換言すれば、多くの人に敵意を買ってしまうという事態が予想されても、また女子修道院長としての信用が失われるという危険性があっても、自らの本心を著作や書簡に書いた彼らの自らに対する厳しさである。自分にとって自分の本心だと思われることを表明せずに、それが本当に本心かどうか自ら吟味する方法があるだろうか。彼らが見せる危険なまでの率直さは、神が心の底まで見透かしているからという消極的な理由だけでは

なく、易きに流れる自己を引き止め吟味するためという理由もあったはずである。

VI 「教養」に、無くてはならない何か

一二世紀から一三世紀にかけて西欧で誕生した大学という教育組織は、そのあり方を様々に変えながらも脈々と、ルネッサンス、近代をへて現代まで至っている。そのような伝統を遡って、その胎動期に活躍したアベラールの生き方を、現代の我々の目から見ると、およそ八〇〇年の隔たりがあるとは思えないほど「近代的」な姿をしているように思える。彼は、あふれるばかりの学問の才能を誇示し（討論において論敵を打ちのめして自らの学識と才能を誇示することで、職業的知識人たる彼は学生を集めた）、芸術を解し（彼の詩作の才能が有名であったことはエロイーズが証言している）、新しい知識に貪欲であると同時に古典にも通じていた。そういう彼の姿に我々は、近代的な教養人の姿を見て取ってしまいがちである。敵を作ることを恐れず、自ら信じることを実行し、波乱の人生を送った彼の姿に、近代的な意味での「実存的な生き方」を見て取ってしまいがちである。しかし、それらの見方はあまりに一面的すぎて、事の本質を見失わせかねないものであると思う。

あまりにも個性的な彼の姿や生き方の背後には、自分の内面まですべて見透かしてしまう神という全能者に対する緊張感と、安易な自己肯定に陥らないための厳しい自己吟味が隠されている。つまり、神にあっては、行為としてまだ現われてはこない「意図」の段階で自己の善悪は判断されてしまうという彼の倫理思想と、そしてまた、自らを苦境に追い込むという結果に繋がろうとも自らの思想を明確な形で表明し吟味するという姿勢とが、彼の背後にはある。この点を考慮に入れたとき、アベラールの姿はまったく違った様相を帯びて我々の前に現われてくるだろう。そして近代的意味での教養人と、大学が胎動し始めたとき、あるいは産声をあげ始めたときの知識人とが大きく異なる一点を浮き彫りにするだろう。つまり、謙虚というあり方と、それに不可分の「汝自身を知れ」というモットーであ

る。

いやもちろん、近代的な意味での教養人すべてに関して、謙虚さや自己吟味の厳しさがなかったと主張するつもりはまったくない。しかし、アベラールが持っていたような緊張感がなくては、いとも簡単に忘れ去られてしまいかねないものであるとは言ってよいと思う。というのも、自分自身について「謙虚である」とか、他人について「謙虚であれ」などという言葉は、謙虚である者であればまず間違いなく口にしないだろうからである。しかしその人の言葉の表面には現われてこないその一点こそ、あるいは自分自身を厳しく見つめる姿勢こそ、「すべての芽を培え」的に与えられた知識を持つ者を、単なる衒学者ではなく真の知識人・教養人たらしめる一点であると言えるのではなかろうか。アベラールが自己批判として聖書から引用しているように「知識は驕らす」（一コリ8：1）[19]のだから。

註

＊ 本論考はトマス研究会・別部会「教養を考える」（一九九八年一〇月二四日、於稲垣良典氏宅）にて口頭発表したものに基づいている。発表の機会を与えてくださり、貴重なご意見を下さった参会者の皆様と、会に感謝申し上げたい。

（1）『アベラールとエロイーズ――愛と修道の手紙――』畠中尚志訳、岩波文庫一九三九年（一九六四年改訳）、一二三―一二四頁。*Petri Abaelardi opera* I, ed. V. Cousin, Paris 1849, p. 97.

（2）鷲田小彌太『教養論』、PHP文庫、一九九七年。

（3）赤塚行雄『人文的「教養」とは何か』、學藝書林、一九九八年。

（4）野田宣雄『ドイツ教養市民層の歴史』、講談社学術文庫、一九九七年。

（5）ジャック・ルゴフ『中世の知識人』柏木英彦・三上朝造訳、岩波新書、一九七七年。

（6）C・H・ハスキンズ『一二世紀ルネサンス』別宮貞徳・朝倉文市訳、みすず書房、一九八九年。

（7）当然のことながら、彼のうまれ育った騎士階級という環境は彼が長じてからも影響を残しているとおもわれる。また、当時の騎士階級、あるいは騎馬槍試合については以下を参照した。ジャン・フロリ『中世フランスの騎士』新倉俊一訳、白水社・文庫クセ

ジュ、一九九八年。

(8) 『アベラールとエロイーズ』、八〇頁。*Petri Abaelardi opera* I, p. 79.

(9) ウンベルト・エーコ『薔薇の名前』河島英昭訳、東京創元社、一九九〇年。

(10) クリュニーにおけるアベラールの晩年については、尊者ピエールによる書簡等で知ることができる。日本語で読めるものとしては、前掲書簡集『アベラールとエロイーズ』巻末の訳者による「解説」や碩学ジルソンによる研究書（エチレンヌ・ジルソン『アベラールとエロイーズ』中村弓子訳、みすず書房、一九八七年）などで詳しく紹介されている。

(11) アベラール諸著作の年代特定については、コンスタント・ミューズ氏に負っている。C. Mews, 'On Dating the Works of Peter Abelard', in *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du moyen âge*, 52 (1985).

(12) アウグスティヌス『告白』（山田晶訳、『世界の名著』一四巻）、中央公論社、一九六八年。

(13) 山田晶「アウグスティヌスと女性」『アウグスティヌス講話』、新地書房、一九八六年。

(14) 書簡自体は H. Ostlender, *Sententie Florianenses*, 1929. に収録されているが、日本語で読めるものとしては、柏木英彦氏が L. Ott に基づき紹介しているものがある。柏木英彦『アベラール』、創文社、一九八五年。

(15) 前掲ジルソン『アベラールとエロイーズ』、参照。

(16) ペトルス・アベラルドゥス『倫理学』（大道敏子訳、『中世思想原点集成』七巻、前期スコラ学）平凡社、一九九六年。Peter Abelard's *Ethics*, ed. & tr. D. E. Luscombe, Oxford 1971.

(17) 例えば、アベラールの『倫理学』を校訂、翻訳しているラスカム氏はその『倫理学』の解説において、アベラールが原罪を否定したという立場を取っている。Peter Abelard's *Ethics*, p.xxxiv.

(18) 彼の言う「汝自身を知れ」には、「モットー」という表現が最もふさわしいように思われる。そもそも motto とは西欧の封建貴族が楯・紋章などに記した題銘であったのだから。

(19) 『アベラールとエロイーズ』、二二頁。*Petri Abaelardi opera* I, p. 9.